

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第80号 2021年8月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 学生からくわしく話を聞くことの可能性	富岡 勝	2
逸話と世評で綴る女子教育史(80) — 青森県立第一高等女学校 —	神辺 靖光	6
1971年9月の大東文化大学父兄会と大学との打合せ — 大学への要望と大学からのお願い —	谷本 宗生	11
学校資料の教材化を模索して②④ — 「二宮金次郎像は2度回収された!？」を事例に —	八田 友和	13
明治後期に興った女子の専門学校(35) 東京音楽学校の存廃論争	長本 裕子	17
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書 (5):鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科(5)	吉野 剛弘	21
発表報告 「雑誌『校友』にみる旧制松本中学の生徒自治像 —どんなことが「自治でない」とみなされたのか—」	富岡 勝	25
『久徴館』のめざすもの(13) 久徴館の意義	小宮山 道夫	31
体験的文献紹介(28) — 閑話休題Ⅲ 東京文化短期大学の改革 —	神辺 靖光	39
刊行要項(2015年6月15日現在)		43
短評・文献紹介		44
会員消息		46

コラム

学生からくわしく話を 聞くことの可能性

とみおが まさる
富岡 勝（近畿大学）

はじめに

勤務先である近畿大学教職教育部では毎年、授業や教員採用試験対策などで多くの学生と出会っているが、コロナ禍の影響もあり、学生とじっくりと話し合う機会が減っているのを自覚している。なんとかしたほうがよいかもしれない。

そんなときに、同僚の吉川武憲氏の著書『教師として大切にしたいこと 教育を受ける側の目線から考える』（つむぎ書房、2021年）を読んで大いに刺激を受けた。

そんなときに、同僚の吉川武憲氏の著書『教師として大切にしたいこと 教育を受ける側の目線から考える』（つむぎ書房、2021年）を読んで大いに刺激を受けた。

教員採用試験対策をきっかけにインタビュー

この本は、吉川氏が大学で毎年実施している教員採用試験の面接練習で面接官役をつとめていく中で感じた疑問をきっかけになって始めたインタビューをもとに作られている。

吉川氏が「あなたはなぜ教師を志望するのですか」と尋ねると、これまで出合った学校の先生に影響を受けた結果と答える学生が予想以上に多かった。これについて、吉川氏は、「私はその答えにとっても興味がわきました。なぜならば、現在学校における教師という仕事は、マイナスなイメージが付きまとい職業になってしまっていると感じるからです」と強い興味をもったと述べている。教師の時間外労働時間が大問題であり、時間外労働時間が過労死ラインと呼ばれる一ヶ月あたり100時間を超えている教師が小学校では3割を超え、中学校では6割に迫っていることを紹介しながら、吉川氏は、次の様に述べる。

そのような大きなマイナス要因があるにもかかわらず学生たちが熱心に教師をめざすということは、その動機付けとなった恩師から受けた影響力が計りしれないほど大きかったことを示すと考

えられます(8頁)

そして吉川氏は、恩師からの影響について学生にインタビューをすることの意味を次のように述べる。

本著では、学生たちへのインタビューを通して恩師のことを詳細に聞き取ることで、それほどまでに学生たちに影響を与えた恩師の姿を当時の子ども目線で蘇らせ、恩師が大切にしていた教育を探りたいと思っています。そこには教師が思っている以上に、教育を受ける側が評価する教育が現れてははずです。それこそが今後ずっと守り続けていかなければ教育の根幹だと私は考えています(8頁)

上記の記述を読んで、なるほどと思った。私も大学で実施している面接練習の面接官役を毎年何度もつとめているが、吉川氏のような疑問を感じたことがなかった。なるほど、同じ活動をしていても疑問のもちかた、着眼点によって、貴重なインタビューのきっかかになるのだろう。

単に話を聞くだけで深められるか？

もちろん、単に学生から話を聞くだけで意味のあるインタビューができるわけではないだろう。

吉川氏はインタビューのなかで次々と問いかけて深めている。

ある面接練習で学生の A さんが面接練習のなかで次のように語ったという。

私は、小学校6年生の時に出会った恩師に憧れて、教師をめざすようになりました。その恩師はかなりベテランと呼ばれるような先生でしたが、教室の中の誰よりもパワフルで、昼休憩には忙しい時間を縫って私たちと遊んでくださりました。それまでも私は学校が大好きな子どもでしたが、その先生に担任してもらった一年間は、本当に「毎日先生に会いたい」「夏休みが早く終わってほし

い」と思うほど、学校が大好きでした。(10頁)

私がこれを聞いたとしたら、「良い先生にであったんですね。あなたは子どもたちとよく遊ぶ教師になりたいんですね。がんばってください」といった言葉ぐらいしか頭に浮かばなだらう。しかし、吉川氏はAさんへのインタビューで次のような問いを次々に発しながら、Aさんの恩師の実践を浮き彫りにしていく。

Aさんの志望動機を聞かせてもらおうと、小学校6年生の時に担任してくれた先生の影響がものすごく強いことがわかるんだけど、その先生がどんな感じの人だったかちょっと教えてよ。(12頁)

楽しい雰囲気をつくるってどんな感じ?(12頁)

小学生くらいだったら特にそうだと思うけど、授業が脱線した時に先生と一緒に乗っていくと、なかなか戻らないことが多いと思うんだけど、そんなときでもきちんと元に戻すことができる先生だったのかな?(13頁)

その先生が何もしないのに慕われることはないはずじゃないかな。子どもたちはこの先生だから「先生の言うことを聞かない」とか思ったはずなんだと思うけど…。だから脱線してもずっと戻っていったと思うんだよね。その先生が慕われていた理由というか、要因というかは、今考えてみたらわかる?(13頁)

小学校6年生位の子と一緒に遊ぶっていうのはすごく大変だと思うけどな。なぜ、その先生はそんなことをしたのかな?(14頁)

例えばどんな叱り方?簡単に言うけど、叱るっていうのは難しいんだよね。具体的に言うとどんな叱り方?(16頁)

こうした質問を繰り返しながら、吉川氏は29年間の中学校教員生

活での経験談を交えながら、Aさんの恩師体験を多面的に明らかにしていった。

このような吉川氏のインタビューによって、目立ちにくい「普通の先生」への注目も促されている。

さて、ここで登場した恩師の先生のことを読んでみなさんはどう感じたでしょうか。インタビュー中にも出てきましたが、何か特別に目立つことがあるようなすごい先生ではなく、言うなればごく普通の先生だったような気がしませんか。しかし、当たり前のことをきちんとやり続けることができる能力はすばらしいものです。全国にたくさんいるこのような当たり前のことを当たり前に行き続ける先生が学校を守っているのです。そして、そんな先生こそが「かっこいい先生なのかもしれません(78頁)

話を聞くことの可能性

本書の吉川氏による10件のインタビューによって、日本の教師の全体像がもれなく分かるとはもちろん言えないだろう。しかし、本書のインタビューによって明らかにされた5つのキーワード「すべてのこどもに愛情を注ぐ」「子どもたちを信頼する」「適切に褒める・叱る」「子どもの力を伸ばす」「よい集団をつくる」は、学ぶ側の目線から生まれた視点として大きな意義をもつだろう。

このように、授業やさまざまな指導をきっかけにして、聞き手が疑問をもちながら、また多様な視点をもちながら学生にインタビューすることは大きな意味があるのではないかと、気がついた。

また、教育史の観点からは、教職員へのインタビューも同じ意味で有意義だろう。興味のアンテナを広げながら、その分野についての多様な視点を吸収して、近い将来のインタビューに備えていきたい。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

逸話と世評で綴る女子教育史(80)

—青森県立第一高等女学校—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

青森県立第一高等女学校が弘前市に開校したのは明治34年4月であるが、藩校を引き継いだ私学・東奥義塾が発足したのが明治6年、弘前教会来徳女学校ライトが開設されたのが明治19年と早い。よって青森県の中学校・女学校の発達を一瞥しておこう。

明治4年7月の廃藩置県は在地の旧藩をそのまま県としたから弘前・七戸・八戸・黒石・館・斗南の6県が成立したが、9月、これをまとめて弘前県とした。旧6藩のうち弘前藩が10万石で一番大きい。戊辰戦争で早くから官軍について戦ったからであろう。しかるに県庁を開く直前に“弘前は県の中央に位置しない”という理由で急遽、港町青森に県庁を置き、青森県になったのである。「学制」公布直後の明治6年、弘前城下に当時の最高学府たる英語学校・中学校を兼ねた私学東奥義塾が設置された。これは旧弘前藩校稽古館の系譜を引くもので旧藩主津軽家から五千両もの経費が提供されたからである。旧制中学校には時習館(愛知県立四中)とか猶興館(長崎県立中学)等、在地の藩校名を名乗るものがあるから藩校から連続した中学校と勝ちであるが、多くは明治10年代の創立で旧藩校の名誉を偲んでつけたものである。しかるに弘前の東奥義塾は弘前藩校稽古館が明治維新の時、英漢学校となり、「学制」に際して旧藩主の援助で私学東奥義塾けうとなって近代中学校に連続した希有な学校であった。

このように弘前は維新以来、先駆けて教育を進める文化都市であった。明治12年、県会ができ、教育令が公布されると、県会も県主脳も中学校を弘前に独占させることなく県内各郡につくるべしという方針に変わり、県内8郡に各一校の郡立中学校をつくった。県及び各郡の首脳は中学校の育成に励んだが、生徒が集まらなかった。とりわけ半島部の上北郡下北郡、北津軽郡の中学校は各学年

全生徒でやっと30人前後という学校もあり、廃校が続いて19年には全校なくなった。

明治19年6月、弘前市元寺町の弘前教会内に来徳^{ライト}女学校が開設された。弘前教会の牧師・本多庸一が函館遺愛女学校長ミス・ハムプトンと協議のうえ、遺愛女学校の経費の一部で開設したものである。校名の来徳^{ライト}は函館遺愛女学校を創設した際、その資金を寄付したカロライン・ライト夫人の遺徳を偲んだものである（本シリーズ47参照）。22年5月、弘前女学校と改称し後年に続いた。現弘前学院聖愛高等学校である。

明治32年2月、「高等女学校令」が公布されると弘前市会は3月、市内の小学校長を集めて高等女学校設置の意見を求めた。小学校長会が高等女学校の設置は急務であると答申したので市はこれを県に上申した。「高等女学校令」第2条に「府県ニ於テハ高等女学校ヲ設置スベシ」とあるので県は同年11月の県参事会にかけたが否決された。しかし県はこれを重要事項と考えて翌33年7月の臨時県会でこれを可決決定したのである。

県が高等女学校設置の地を弘前市に執着したのは学齡児就学率の高さにあったろう。当時、青森県の学齡児就学率は57%で高いと言えないが、弘前市に限って見れば80%である。さらに女兒就学率をみると66%と高率である（明治32年『東奥日報』）。県全体で見れば低い学齡児就学率が、弘前市に限れば高率であった。特に女兒の就学率が高い。県が高等女学校設置の地を弘前市に定めた理由の第一はこれであろう。

ところで女兒就学率が高く、市民が女学校設置を望むということは伝統的な文化都市弘前にさらに知識人階級が加わったということであろう。これを産業、交通、軍事面から考えよう。この地は藩政時代から醸造、漆器、織物が盛んで明治になってからもそれを継続したが、なかでも織物業は弘前を中心とする津軽地帯で盛んになった。新しい産業としてはリンゴの栽培をあげねばならない。東奥義塾の外国人教師イングが故郷の米国インディアナ州から持参し移植したのがはじまりでこれをインドリンゴと名付けた（インド産ではない）といわれるが、主力

は内務省勸業寮が士族授産の一環として津軽士族にリンゴ栽培を指導したことが発端である。明治後半期には南部地方の馬匹飼育と並んで青森県生産の最上位になった。明治24年に青森・上野間の鉄道東北本線が開通したこと、27年に弘前・青森間の奥羽本線が開通したことも見落とせない。これによって弘前のリンゴ、南部の馬匹、その他の生産品も日本国中に販売されたのである。日清戦争後、来るべき日露戦争を睨んで日本軍は大軍拡を行った。陸軍はこれまでの6師団制から13師団制に拡大した。その第8師団司令部が明治29年、弘前に置かれ、青森・岩手・秋田・山形の4県と宮城県下の3郡がその軍管区になった。師団の統轄下に歩兵連隊・騎兵連隊・砲兵連隊と工兵大隊・輜重大隊。軍医部・獣医部が附属する。弘前には隷下の第31歩兵連隊がつくられた。師団司令部の参謀高級将校と歩兵連隊の多数の将校とその家族が一挙に市内に住みついたのである。陸軍将校は知識階級である。その子弟は就学、進学を望む。

明治33年の臨時県会で第一高女設置を決定した県は学校諸規則をつくるとともに旧城に近い蔵王町に校地を求め総工費8,939円で34年3月に新校舎を建てた。34年2月に長崎県視学・近藤良蔵が初代校長に任命され、教諭2名、助教諭3名、助教諭心得1名と学校医も決まり教員陣容が整った。3月、1年生2年生の生徒募集をおこない、試験の結果2年生50人、1年生70人の入学生があった。その大半は弘前市で郡からの生徒は極めて少い。なかで他府県からの入学生が10人が目につくが、これは陸軍将校の子女である。また親の職業としては官公吏、教員、医師、弁護士、工業者等が目につく。弘前市はみちのく青森県の中で特種な先進都市になったのである。

教育課程は「高等女学校令施行規則」に則り4年制で随意科目の外国語は「当分欠ク」とした。授業料は一人一ヶ月70銭(36年から1円に増額)である。こうして開校した2ヶ月後の6月1日、当校校庭において盛大な開校式を行った。主催者の青森県知事、弘前市長、県会議員、市参事会員は言うに及ばず、青森県師範学校長、県立中学校長、東奥義塾塾長、小学校長の面々も顔を揃えた。異色は弘前師団の幹部の勢揃いである。師団長をはじめ旅団長、歩兵、騎兵連

隊長、工兵大隊長、憲兵隊長等、在弘前の陸軍幹部全員が出席した。教育勅語奉読、式辞、祝辞と一連の式次第が終ると余興として生徒による音楽に合わせてのカレドニア、カドリユス(集団ダンス)や徒手体操があった。また教室には生徒の作品、作文や図画、裁縫手芸を展示して供覧して貰った。開校2年目、新入学生も順調に増えたので校舎を増築し理科室、体操室、3年目には音楽室、作法室、割烹室もつくり当初からあった裁縫室、図画室を加えて特別教室を完備した。また郡部から入学した生徒のために市内百石町小路の民家を借りて仮寄宿舎とした34年度の入舎生は9名であったが漸次増加し39年度は20名になった。37年度から修業年限一ヶ年の補習科を設置した。この課程を修おえると小学校本科正教員の免許状が授与された。本県にはまだ独立の女子師範学校がなかったので小学校女教員の供給源の一つとされたのである。

開講間もない34年6月、校長を会長とし、教職員と全生徒を会員とする校友会をつくった。演述、対話、朗読等を行う講演部、音楽演奏をする音楽部、校友会誌を編纂発行する編纂部、遊戯・遠足等をする運動部からなり、講演会、音楽会、運動会、遠足等を行事化していった。とりわけ日露戦争がはじまるとすべての行事が日本軍の激励、戦勝祝賀会になり熱烈になった。第8師団司令部、第31歩兵連隊出征・凱旋の時は弘前駅頭は市民ともども第一高女生徒の歓声に沸いた。

初代校長・近藤良蔵は本校の創設に文字通り無から出発して高等女学校の形を整えたが在職2年6ヶ月で36年8月、大分県立高等女学校長に転出した。その後、何人かの教諭が校長心得



初代校長 近藤良蔵



2代校長 永井直好

として繋いだが、36年11月、帝国大学法科大学卒業、山口高等学校教授の経歴を持つ永井直好が青森県立第一中学校校長兼任で本校校長になって当校を繁栄に導いた。

最後に服装を記そう。服装規程はなかったが、「生徒心得」に登校には袴を着け衣服髪飾の質素を強調した。袴は海老茶から紫紺色になり裾下5寸に黒の布テープをつけた。運動の時はこれに袴がけという格好であった。明治42年4月、青森県立弘前高等女学校と改称し後年に続く。



生徒平常服

参考文献

『八十年史 一青森弘前中央高等学校』『弘前市教育史 上』

葛西富夫『青森県の教育史』

前野喜代治『青森県教育史 上』

宮崎道生『青森県の歴史』

1971年9月の大東文化大学父兄会と大学との打合せ

— 大学への要望と大学からのお願い —

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

このニューズレターの第37号(2018年1月)所収で、大東文化大学の創立50周年にあたる「1973年度の大東文化大学父兄会定例総会にて—大学側の近況報告—」(10~11頁)を取り上げた次第である。今回は、1971年9月の大東文化大学父兄会(現:大東文化大学青桐会)と大学との打合せから、父兄会から大学への要望と、大学側から父兄らへのお願い、を紹介してみたいと思う。

父兄会から大学への要望は、次のとおりであった。**教務関係**について:①学生の学力低下が目立つので、いっそうの指導を望む。②学業成績はできるだけ早く送ってほしい。⇒進級通知に同封して送られている。③経済学部^①に観光関係の教科を設けてもらいたい。④成績表の見方がよく分からない。⑤卒論のない学科があるが、その点を説明してほしい。⇒経済学部にはいわゆる卒論はなく、それに代わるものとして、ゼミナールの研究論文を提出するようになっている。⑥成績の要注意者については、事前に父兄に知らせてほしい。**学生部関係**について:①親もとへ便りをしない学生が多いので、その辺を指導してほしい。②ゲバなどに巻き込まれないよう、大学としての監視注意を願いたい。③大久保事件の例などもあるので、女子寮の監督をしっかりと望みたい。④学部・学科教科の違う学生の同居は、勉学の点で支障はないのか。⑤寮によって違う寮費を、一律に共通にできないのか。**就職関係**について:①就職未決定の者への対策はどうなっているか。②地方別の就職・未就職の表がほしい。③地方の地域社会への就職を、もっと勧奨してほしい。④昨年と本年の就職状況の対比が知りたい。

いっぽう、**大学側からの父兄らへのお願い**は、次のとおりであった。①一般的な傾向として、学生に対する過保護が目立つ。機会をみて、しっかり「本当の意味のしつけ」について話し合してほしい。②大学はけっして高等学校の延長ではな

い。したがって、大学の学生は自ら学び、自ら考える、というのでなければならない。この点についても、父兄ら皆さんによく考えていただきたい。

そして、父兄会と大学の学生部とがもっか協力して、父兄会の事業目標の1つである、**学生県人会**の組織づくりの検討も進められ、各県ごとに指導教員を配置してもらいたいとしている。岡山県の県人会責任者である守屋正雄さん（経済・3年）によれば、「学生間に友情が芽生え、学園生活がより充実したものになるように、そしてまた**故郷の父兄と学生の間**のかけ橋となるように、県人会を全国的に発足させよう」と述べ、各県ごとの県人会名簿作成や入会勧誘などを行い、同年10月には、県人会責任者会議を開き、全国県人会連合準備委員会を発足させている。翌11月の大学祭・大東祭においても、「県人会フェスティバル」が催されたのである。

実際に71年3月中に開かれていた、福岡県人会による「県人書作展」（福岡市・県文化会館で開催、延べ千名の観覧者）や、佐賀県人会による「県人書作展」（佐賀市・中央画廊で開催）などに対して、父兄会は予算援助をとまなう協力や応援を精力的に行っていたのであった。

1973年9月に刊行された『大東文化大学父兄会十年史』の巻頭には、佐伯梅友学長が、大学父兄会が「子弟の学生生活を有効かつ快適ならしめるためにも、また、会そのものをととのえて全国にちらばる父兄との連絡を密にする組織を作っていくためにも、言うのは易く行なうのはむずかしい」存在や役割であると、大学父兄会の「御労苦と会員の皆様の御協力とには、深い敬服と感謝の心をささげずにはいられません」と謝辞を述べている（序文：父兄会十周年記念誌に寄す）。大学にとって、このようなステークホルダーの存在や役割は、他校とはまた違うスクールカラーを形成していく重要な鍵といえるだろう。

学校資料の教材化を模索して②④

－「二宮金次郎像は2度回収された!？」を事例に－

はった ともかず

八田 友和 (クラーク記念国際高等学校)

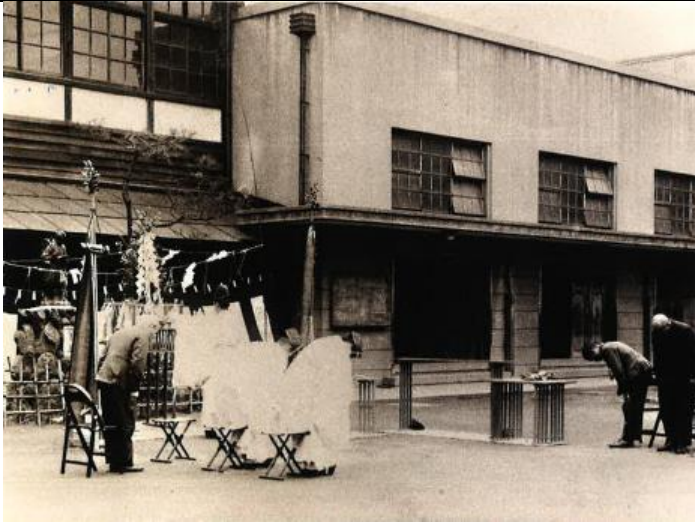
1. はじめに

近年、学校内に設置されている二宮金次郎像の撤去が行われている。撤去される理由は、「児童の教育方針にそぐわない」「子どもが働く姿を勧めることはできない」「戦時教育の名残という指摘」「歩きスマホを助長する」など、様々ある¹⁾。一方で、YAHOO!ニュースの「みんなの意見」で行われた「二宮金次郎像の撤去、どう思う?」という投票では、投票した 46955 人のうち、86.6%にあたる 40657 人が「残念に思う」と回答しており、二宮金次郎像の撤去を惜しむ声も上がっている²⁾。

以上を踏まえ、二宮金次郎像の回収についての調べ学習および、二宮金次郎像を回収することの是非を考える場を設けたため、その概要を整理・提示する。

2. 二宮金次郎とは

二宮金次郎(後の二宮尊徳)は、「天明7(1787)年、現・神奈川県小田原市生まれ。幼少期に生家が没落、両親と死別した。勤勉・儉約の精神を説き、小田原藩など各地で財政再建や農村復興に尽力。昭和前期の教科書には「親孝行」「兄弟仲良く」「仕事に励む」「学問」「勤勉」などの良い例で二宮金次郎が取り上げられていた³⁾という経歴や特長がある。そのような二宮尊徳の経歴や考えを踏まえて、各地の学校で卒業生や地元住民が二宮金次郎像を学校に寄贈することが流行した。しかし、国家総動員法に基づき、1941(昭和16)年8月に出された金属回収令によって、二宮金次郎像の回収が行われた。この回収は、「銅像の応召」と呼ばれ、楠木正成像の回収も行われた。



資料Ⅰ 金次郎像の金属回収
(出典)『図録 近代日本の道德教育』p.58

3. 授業の流れ

本実践の概要は次の通りである。

- (1) 科目名:総合学習(専修学校の科目)
- (2) 期 間:2020年8月2日(月)9:20～10:10
- (3) 場 所:クラーク記念国際高等学校 芦屋キャンパス
- (4) 担 当:筆者
- (5) 課題内容:「二宮金次郎像は2度回収された!？」
- (6) 回収人数:11人
- (7) 授業の流れ・方法

課題内容は、「二宮金次郎像は2度回収された!？」である。このタイトルは、言わずと知れた『007』シリーズ第11作の作品である「007は二度死ぬ」を文字ったものである(知っている生徒がほとんどおらず、いたたまれない気持ちになったことは伏せておく)。さて、授業の冒頭で、ミッションが書かれた用紙を配布して、各自で調べ学習を行った。生徒に提示したミッションは下記のとおりである。

ミッション1:そもそも学校に二宮金次郎像が設置された理由を探れ!
ミッション2:二宮金次郎像が回収されている理由を探れ!
ミッション3:金属回収令でなぜ金次郎像が回収されたのか
ミッション4:二宮金次郎像の回収に賛成・反対 自分の意見をまとめよう

調べ方は生徒に委ねており、教職員への聞き取り、スマートフォンやタブレット端末での調べ学習も許可している。調べ学習の時間として30分設定し、自由行動とした。対人関係やコミュニケーションに難を感じている生徒も多いため、作業は個人ワークとして実施した。

4. おわりに

本稿では、二宮金次郎像を取り上げた授業実践について整理・提示した。二宮金次郎像の回収は、生徒にとって身近に感じやすい事例であるとともに、社会的にも大きなニュースとして取り上げられている問題でもある。よって、二宮金次郎像の回収の是非を考えるだけでなく、世の中でも問題視されていることや、論争になっていることを知るきっかけにもなったと考えている。今後も、身近な話題から、社会問題を考えるきっかけを探っていきたい。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、クラーク記念国際高等学校の石川真椰氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

【註】

1) テンミニッツTV「学校から「二宮金次郎」像が消えている理由」を参照(最終確認 2021年8月1日)

https://10mtv.jp/pc/column/article.php?column_article_id=1679

2) YAHOO!ニュース「二宮金次郎像の撤去、どう思う？」

(最終確認 2021 年 8 月 1 日)

<https://news.yahoo.co.jp/polls/domestic/7514/result>

3) 『京都市学校歴史博物館常設展示解説図録』p.36 を参照

【参考文献】

- ・京都市教育委員会・京都市学校歴史博物館(編)2009『京都市学校歴史博物館 常設展示解説図録』
- ・京都市学校歴史博物館(編)2018『図録 近代日本の道德教育』京都市学校歴史博物館
- ・文部科学省 2019『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説-地理歴史編-』東洋館出版社
- ・テンミニッツ TV「学校から「二宮金次郎」像が消えている理由」を参照(最終確認 2021 年 8 月 1 日)

https://10mtv.jp/pc/column/article.php?column_article_id=1679

明治後期に興った女子の専門学校(35)

東京音楽学校の存廃論争

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

明治20年10月、音楽取調掛が東京音楽学校と改称され、文部省編輯局長伊沢修二が兼任し、初代校長となった。同年10月、文部省より官制の改正が公布された。

第1条 東京音楽学校ハ文部大臣ノ管理ニ属シ音楽師マタハ音楽教員タルベキ者ヲ養成スル所トス

というように、第1条で目的が音楽家または音楽の教員を養成することであると謳われた。第2条以下で、学校長、教授7名、助教授8名、幹事1名、書記5名の教員の組織が明らかにされた。

20年4月から女子の入学が復活した。女子に音楽教育は適しており、かつ必要であるという見解からである。伊沢校長は、20年の年報で、特立の音楽学校にふさわしい校舎と、演習場の建築が必要なことを報告した。

22年1月、東京音楽学校規則が制定された。学科は、

予科:修業年限1年

本科:師範部(修業年限2年)、専修部(修業年限3年)

選科:洋琴(ピアノ)、風琴(オルガン)、ヴァイオリン、唱歌の内1~3科目を選修する。

研究科:本科専修部を卒業してなお学術を精究する者対象。

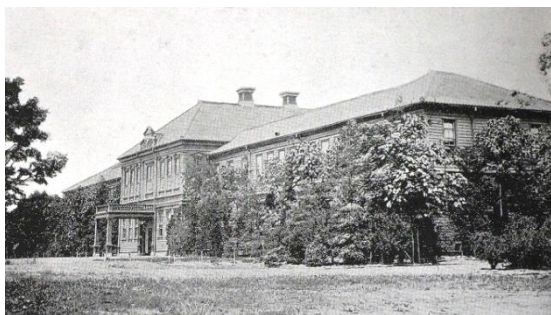
とした。

入学試験科目は、「体格」身体健康、「学力」高等小学校卒業以上もしくは之と同等の学力、「唱歌」唱歌集初編卒業以上、「英語」綴字、読法、文法であった。

21年の生徒総数は47名。その内訳は、研究生7名、専修部3年生4名・1年生12名、師範部1年生9名、予科生15名であった。

音楽の専門機関となった東京音楽学校は、21年11月、オーストリア人のオルガニスト、ルドルフ・ディートリッヒを迎えた。ディートリッヒは、ピアノ、ヴァイオリンも巧みで、管弦楽法にも熟達していた。このディートリッヒが幸田延のヴァイオリンの才能を見出した。延は18年7月に音楽取調所を卒業し、研究生であり助手を務めていた。22年4月、延は第1回文部省音楽留学生として、アメリカ・ボストンへ留学。翌23年一旦帰国の後、オーストリア・ウィーンへ5年間留学する。延の留学は、果たして日本人が音楽家として世界に通用するかどうか、期待がかかっていた。

伊沢校長の念願がかなって、23年5月、東京音楽学校の新校舎が落成した。工費は200万円余。東四軒寺跡から上野公園元西四軒寺跡（現在地）に移転した。敷地面積約7,118坪、木造2階建の校舎面積約382坪。2階中央に講堂を兼ねた音楽



明治23年5月新築の東京音楽学校校舎
（『東京芸術大学百年史』）

用のホール奏楽堂が備えられた。奏楽堂は、音響学者上原六四郎による音響設計で、音響効果が非常に良好と西洋人からも賞賛された。後に滝廉太郎がピアノを弾き、山田耕筰が歌曲を歌い、三浦環が日本人で初めてオペラを演じた奏楽堂は、東京音楽学校のシンボルとなり、現在も上野公園内に移設され、コンサートなどで活用されている。

明治23年11月29日、第1回帝国議会開院式が行われた。同日午後2時より、帝国議会開院の祝賀音楽会が奏楽堂で催された。伊沢校長は祝辞の中で、“…唱歌は忠君愛国の心情を発する最も適したものである…”と述べた。続いて約800名の来会者一同が「君が代」を2回合唱し、この日のために作曲された「帝国議会開院之児歌」を、東京府下九つの小学校生徒徒約

100名が合唱した。最後に全国から募集した優秀な歌詞に、東京音楽学校教授の上真行うえまねみちが作曲した「帝国議会開院之頌第一」が東京音楽学校生徒によって合唱され、祝賀会を締めくくった。このように東京音楽学校を上げて帝国議会開院を祝った。

ところが、それから1ヶ月も経たないうちに、24年度予算を審議していた予算委員会で、経費削減を理由に五つの官立高等中学校、女子高等師範学校とともに、東京音楽学校廃止の声が上がったのである。『東京芸術大学百年史』をもとに事の経緯を概略しよう。

24年1月29日・31日、議会で上記の学校の存廃論争が起こった。議会外でも種々の議論が沸き起こり、新聞各紙で連日報道された。廃止が提案されている学校の政府支出金合計は約33万6,000円である。政府全体の歳出約8,000万円の0.42%にすぎない。そのようなわずかな支出削減のために高等教育の学校を廃止すべきではないというのが世論の大勢だった。東京音楽学校の政府支出金原案は1万2,200円。『東京朝日新聞』や『毎日新聞』など“宮内省の雅楽部と一緒に、300万円もある帝室費にお願いしてはどうか”という意見もあった。“古来音楽は耳目を喜ばせるもの思っていたが、1年間に1万円余りの大金を投じて音楽学校を維持させる理由は何か。文部省は教育を知育・徳育・体育の三部類に分けると聞か、音楽は何の部類に属するのか。”などという愚問を発する議員もいた。『大日本教育会雑誌』第102号（明治24年1月）は、情操を豊かにする音楽の効用を掲げ、“東京音楽学校は、音楽教員を養成し、各学校に音楽教育の普及を図っている。従来ひわいの俗曲中、曲風は優秀であっても歌詞が卑猥なものについて、歌詞を修正して楽譜を作り、西洋の音楽の長所を採って、我が国風に適するようにして、教育音楽上の趣味を高尚にするよう図っている。東京音楽学校は必要である。”などと説いた。“百聞は一見に如かず”と、24年3月10日と17日に議員の東京音楽学校参観が実施され、種々の楽曲の演奏と伊沢校長の説明が行われた。最後に邦楽の代表曲の一つ『六段』が山勢松韻の箏、

原^{じょどう}如童の尺八、遠山^{きね}甲子のピアノの和洋楽器により見事に演奏された。伊沢校長はじめ音楽学校関係者らの尽力と世論に助けられ、立憲自由党が音楽学校の廃止を主張したが、改進黨が原案に修正を加えても存続させるべきだという方針を出し、なんとか存続が決定した。

それから3ヶ月後の24年6月12日、大木喬任^{たかどう}文部大臣就任の披露宴の席で、伊沢は“文部省は教育事業の統一を欠いている。”と文部行政を批判した。音楽学校廃止論などをめぐってうっ憤がつのっていたのであろう。翌13日、伊沢は、音楽取調掛設置以来心血を注いできた東京音楽学校の校長非職を命じられ、14日辞表を提出した。伊沢を慕う音楽学校の教職員・生徒たちは文部大臣に陳情したが受け入れられなかった。その後伊沢は、台湾教育や吃音・聾啞者の矯正事業などに生涯を捧げた。30年、貴族院議員に推薦された。

しかしながら東京音楽学校は、国家財政の経費削減という名目で、26年9月から東京高等師範学校付属校に格下げ、縮小された。

参考文献

『創立五十年記念』東京音楽学校

『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇第一巻

生田澄江『瓜生繁子』もう一人の女子留学生

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書

(5):鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科(5)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号では、引き続き鳥取東高等学校より刊行されている『柏葉』に掲載された専攻科の教育課程に関する情報を検討する。今号では1984(昭和54)年度から1996(平成8)年度までの教育課程を対象とする。

対象年度の教育課程は、本論末尾にある表の通りである。

1984(平成1)年度以降は、「日本史・世界史・地理」が同一時間に開講されるようになり、必然的にこれらのうちの1科目を選択する体制となった。共通一次試験のことを考えると、地理や歴史だけで2科目選びたいという者もいただろうが、それは不可能になったということである。

翌1985(昭和60)年度には、数学が学習指導要領上の科目名ではなく、独自の科目名を導入した。とはいえ、各科目の内容を見ると、Aが1年相当、Bが2年相当、Cが3年相当の内容である。学習指導要領改訂にともない、科目名称が長くなった上に、1学年で2科目履修する体制になったことを受けての改正であろう。文系学部の入試で数学が課される場合は、数学Bと数学Cの内容、すなわち2年まで履修している科目が課されることがほとんどで、理系学部では数学Aの内容も課されるのが一般的であったわけで、時間割でも数学Aは文系科目と重ねられている。なお、ここでは示さないが、担当教員を見ると、数学Bは文系と理系でクラス分けしていることが分かる。

また、学習指導要領改訂にともない新規に導入された「理科Ⅰ」「現代社会」も加わった。しかも、現代社会は他の科目との重複はない。共通一次試験対策であろうが、どちらも1年限りのものであった。1987(昭和62)年に実施される試験(1986(昭和61)年度の生徒が受ける試験)から理科と社会は1科目でよくなったことに関わる変更と考えてよいものと思われる。

その後は比較的安定した状態が続くが、1996(平成8)年度には数学の科目の再整理が行われた。この年度の本科3年生は新学習指導要領の1期生のため、学習指導要領改訂にともなう出題内容の変更に備えたものと推察されるが、教科書等が不明なため、詳細は不明である。詳細は次号で触れるが、翌1997(平成9)年度には、学習指導要領の科目名と同じ体制に再び変更されてしまうので、他の年度の状況から類推することもできない。時間割から見る限り、数学Zが文系科目と重ねて開講されていることを考えると、理系の生徒には必要な内容がそこに含まれているものと考えられる。なお、数学Yは文系と理系でクラス分けをしているので、数学Yはレベル的には数学B(本科2年相当)に相当するものを課していたと考えてよいだろう。

1997(平成9)年度からは文系と理系の教育課程が示され、選択パターンも示されるようになる。次号ではその状況を検討する。

		1984 (昭和59)	1985 (昭和60)	1986 (昭和61)	1987 (昭和62)
国語	現代国語	3	2	2	2
	古典	3			
	古漢文				
	古文		2	2	2
	漢文		2	2	2
	選択国語	2*			
	選択現代文		2*	2*	
社会	日本史	2 [△]	2 [△]	3 [△]	3 [△]
	世界史	2 [△]	2 [△]	3 [△]	3 [△]
	地理	2 [△]	2 [△]	3 [△]	3 [△]
	政治経済	2 [○]			
	倫理社会	2 [○]			
	現代社会		2		
	選択日本史		2 [○]		
数学	数学I	4			
	数学II	3*□			
	数学III	3*□			
	数学C		4	4	4
	数学B		3*○	3	3
	数学A		3 [○] □	3*	3
	数学X				
	数学Y				
数学Z					
理科	物理	3 [☆]	3 [☆]	3 [○]	3 [○]
	化学		3 [☆]		
	化学I	3 [☆]		3 [○]	3 [○]
	化学I・II	3 [▼]			
	化学II		3 [▼]	3 [□]	3 [□]
	生物		3 [☆]	3 [○]	3 [○]
	生物I	3 [▼]			
	理科I物地		2 [▼]		
理科I化		1 [□]			
英語	R	5	6	6	6
	C	2	2	2	2
	選択英語	2 [□]	2 [□]	2 [□]	2 [□]
体育		1	1	1	1
太字は必修科目。					
各科目の数字は週当たりの単位数。					
*○△□☆▼は、同一時限に開講などの理由で選択となっている科目。					
数学Cは共通試験対策、数学Bは代数幾何・基礎解析、数学Aは微分積分・確率統計であることが、教科書より分かる。数学X、数学Y、数学Zの区別は教科書の記載がないため不明。					

		1988	1994	1995	1996
		(昭和63)	(平成6)	(平成7)	(平成8)
国語	現代国語	2	2	2	2
	古典				
	古漢文			3	3
	古文	2	2		
	漢文	2	2		
	選択国語				
	選択現代文	4*	2*	2*	2*
社会	日本史	3 [△]	3 [△]	3 [△]	3 [△]
	世界史	3 [△]	3 [△]	3 [△]	3 [△]
	地理	3 [△]	3 [△]	3 [△]	3 [△]
	政治経済				
	倫理社会				
	現代社会				
	選択日本史				
数学	数学Ⅰ				
	数学Ⅱ				
	数学Ⅲ				
	数学C	4	4	4	
	数学B	3	3	3	
	数学A	3*	3*	3*	
	数学X				4
	数学Y				3
	数学Z				3*
理科	物理	3 [○]	3 [○]	3 [○]	3 [○]
	化学				
	化学Ⅰ	3 [○]	3 [○]	3 [○]	3 [○]
	化学Ⅰ・Ⅱ				
	化学Ⅱ	3* [□]	3* [□]	3* [□]	3* [□]
	生物	3 [○]	3 [○]	3 [○]	3 [○]
	生物Ⅰ				
	理科Ⅰ物地				
	理科Ⅰ化				
英語	R	6	6	6	6
	C	2	2	2	2
	選択英語	2 [□]	2 [□]	2 [□]	2 [□]
体育		1	1	1	1

発表報告「雑誌『校友』にみる旧制松本中学の生徒自治像 —どんなことが「自治でない」とみなされたのか—

富岡 勝(近畿大学)

はじめに

2021年8月28日の旧制高等学校記念館の第25回夏期教育セミナーの一環として、オンデマンド動画(8月27日~8月31日配信)を作成した。コロナ禍のため、昨年の夏期教育セミナーは中止になり、今年は基調講演をZOOMで、研究発表をオンデマンド動画というかたちで準備した。

授業では昨年からコロナへの対応として動画をつくって配信するということもこなってきたが、研究発表を動画でおこなうのははじめてであった。どうなることが不安もあったが、授業と同じようにPowerPointで約50枚のスライドをつくり、そのスライドに音声を入れて35分の動画をつくった。

やはり対面でみなさんの前で発表したほうが、反応がすぐわかり、やり甲斐が感じられるが、動画での発表は、論文の刊行に比べれば声を使いながら表現できるという意味で、今後、動画の品質を上げることができれば発表方法の一つとしての可能性もあるかもしれない。

発表内容は、本ニューズレター第3号から第10号に掲載された「どんなことが「自治ではない」とみなされたのか 1934年の松本中学の場合(1)~(8)」の一部を活用しながら、松本深志高等学校の「自治」に関する共同研究で出された視点を使って構成した。

以下、動画で使ったスライドの一部を本ニューズレターで紹介してみたい。

「雑誌『校友』にみる旧制松本中学の生徒自治像 —どんなことが「自治でない」とみなされたのか—

旧制高等学校記念館第25回夏期教育セミナー
研究発表（2021年8月27日～8月31日）

富岡勝（近畿大学 教職教育部教授・建学史料室研究員）



発表の構成

本発表の概要

1. 本発表の目的
2. 旧制松本中学校に注目した理由
3. 「これは自治ではない」論①（1934年、生徒松沢甲三）
4. 「これは自治ではない」論②（1934年、卒業生滝沢憲一）
5. 「これは自治ではない」論③（1914年、卒業生佐藤信愛）
6. 「これは自治ではない」論④（1903年、雑報欄）
7. 小林有也校長の指導
8. 考察

発表の目標

1. 本発表の目標（その1）

旧制松本中学を事例として、時代ごとの「自治」の内容の変遷を、校友会雑誌『校風』における「これは自治ではない」といった言説に注目しながら明らかにしたい。



松本深志高校正門前
2013年2月22日 富岡撮影

1. 本発表の目標（その2）

「自治」が標榜されても、具体的にどのような活動を指して「自治」と呼ばれるのか曖昧なことが多い。

→ 具体的にどのようなことを「自治ではない」と述べられているのかを生徒や卒業生が執筆した『校友』の記事から探すことで、各時期の自治を具体的に知りたい。

旧制松本中学
に注目した理由

2. 旧制松本中学校に注目した理由（その1）

旧制松本中学校（1876年、第2大学区第17番中学変則学校として発足）では、全国的に見て早い時期に成立した相談会（1890年ごろ創立）があり、矯風会（1900年）とともに自治活動の中心となっていた。

戦後の松本深志高等学校においても旧制松本中学校以来の「自治の精神」が伝統として意識されている。

→ 戦後の松本深志高校の「自治の精神」は、旧制松本中学校時代から変化したのか、変化していないのかということを考えていく手掛かりにもしたい。

2. 旧制松本中学校に注目した理由（その2）

相談会（1890年ごろ創立） 生徒の自治機関。生徒全員が集まり、学校生活のことを相談して決定。雑誌『校友』刊行も相談会にかけられた。
→ 相談会は、校友会活動（生徒が全校の規模で参加しする課外活動）の先駆例の一つといえる。校友会・学友会は校長を会長とし教員が部長となるような組織（東京府尋常中学校など）とは異なった形態。

矯風会（1900年ごろ創立） 生徒の風紀を守るために全校生徒で組織した会。生徒への忠告など。

「これは自治ではない」論の例

3. 「これは自治ではない」論①（1934年、生徒松沢甲三）その3

「松中の自治は、吾々が一致団結して実際に行つて後はちめて真価が現はれるのであります」〔43頁〕

「まだまだ応援をにげる者がある、応援団も決して幹部だけのものではなく全校友のものだ、校友は幹部に指摘されるまでもなく自らすすんで応援をなすべきである。応援は団結心を養成するものである」〔44頁〕

つまり、「利己心を捨てて応援で一致団結することが自治である」ということ？

「これは自治ではない」論②（1934年、卒業生滝沢憲一）その2

曾て学校が生徒を処分した件に関して一部の自称愛校者が自治の滅亡を叫んだ事があるが、それは考へ方が悪いので、生徒の処分は中学校令によつて国家が学校当局に付与したる権能であつて、自治に所謂校規取締の通常の範囲を脱却してゐる」（37頁）

つまり、「学校の生徒処分方針に反対するのは自治の範囲を逸脱していることだから自治ではない」ということ？

「これは自治ではない」論③（1914年、卒業生佐藤信愛）その3

こうした自治の要素（範囲つきの自由意思、責任の観念、自分達の内部での監督）は、

「生れ乍らに有すると雖も亦後天的に自ら修養しなければならぬ」ので、「国家は社会制度を設けて助長を策り先覚者は又此の観念を誘掖する様に努めなければならぬ」〔61頁～62頁〕

佐藤は、「自治の要素（範囲つきの自由意思、責任の観念、自分達の内部での監督）が無い自治は自治ではないので、先覚者の導きが必要であると述べている。

「これは自治ではない」論④（1903年、雑報欄）その2

「相談会は神聖のものである。敢えて私意を挿むものでない。各員は皆着実な態度を以て忠実に議せなくてはならない。然るに稍もすれば下らない処へ私意を挿み、徒に無責任の事を謂ひ又頗る軽薄の言を吐き、奇言を弄して無暗に豪（え）らがる輩がある」〔86頁～87頁〕

この雑報執筆者は、「相談会の自治は生徒個々の自由と責任で実行されるものであり、私意が挿まれた活動は自治ではない」と主張している？

考察

考察 その1

小林有也の最期の言葉「諸子はおくまで精神的に勉強せよ……」は、知人の卒業生によれば、戦後の松本深志高校生徒にも共有されていたという。ただし、この言葉の指す意味は広い。

今回の発表で紹介したように、生徒や卒業生が「これは自治ではない」として述べる内容は、時代によって変化があったのではないかと考えられる。

考察 その2

- ・たとえば昭和前期の1934年ごろには、「利己心を抑制して一致団結しなければ自治ではない」ことが強調され、大正期の1914年には、立憲制度を支える自治であるために必要な要素（範囲つきの自由意思、責任の観念、自分達の内部での監督）が強調される言説が雑誌『校友』上の記事に見られた。
- ・「一致団結」を強調するか、「自由意志」を強調するかで、「自治」ニュアンス（例えば議論の丁寧さや強制力など）はかなり変化した可能性がある。

考察 その3

- ・今回紹介した雑誌『校友』だけで各時代の自治の内容が完全に解明できたとはいえない。
- ・『校友』には、自治の内実を問うような記事は思ったより少なかった。今回紹介した記事の背景について、雑誌『校友』の校内での位置づけを問い直したり、他の史料を探したりしながら慎重に検討していく必要があるだろう。

以上

『久徴館』のめざすもの(13) 久徴館の意義

こみやま みちお
小宮山 道夫(広島大学)

『久徴館同窓会雑誌』は1895(明治28)年12月に最終号となる第84号を発行した。前号は10月発行なので一ヶ月空いており、この年は3月から6月も発行できていなかったため、最後の年は年間7冊の発行で終刊を迎えたことになる。前半の休刊は日清戦争の影響で久徴館幹事7名のうち4名が公務等で東京を離れたことに起因する。幹事は実質的な雑誌編集担当者であったため、戦力不足で発行できなくなってしまったということである。一方で11月の休刊は単純に印刷所の都合だったようである〔『久徴館同窓会雑誌』第84号、34～37頁〕。

最終号は前号と同様に日清戦争に関わる叙勲・叙功の被授与者の一覧「名誉の亀鑑 其二」が巻頭に置かれ、久徴館の行事の記録である「天長節」、雑誌の廃刊を伝える「明治廿八年終刊の辞を述へ兼て本誌の廃刊に及ぶ」と続く。巻頭部分以降の誌面構成は通常どおりで、「論叢」「史伝」「説林」「論叢」「文苑」「雑報」「特別広告」「広告」の各欄がある。「論叢」欄には土岐横「久徴館閉鎖の議を読みて」、吉木竹次郎「久徴館決して閉鎖すべからず」、早川千吉郎「久徴館閉鎖の理由を論じて将来三州学生の養成に及ぶ」といった久徴館閉鎖に関する記事3本が掲載された。「史伝」欄には柴田勝家に討ち取られた一向一揆の侍大将「土屋大学」が取り上げられている。土屋大学は農書『耕稼春秋』の著者土屋又三郎の先祖でもあるがそのことには触れず現在の子孫の状況について伝えている。欄の末尾には「布衣遊子の朝鮮漫筆(自第二十一至大尾)は誌面の都合に依り今回に限り掲載を見合せ識者諒せよ 記者識」とあり、この欄においては廃刊の空気はない。久徴館廃止と本誌の廃刊が決まっているとはいえ、同窓会は加越能郷友会として改組の上存続し、『加越能郷友会雑誌』も発行する見込みが立っていた故なのであろう。続く「説林」欄には矢木亮太郎による「従軍所感記事」の続報、山下栄太郎による「文武の両勇並に故細井中尉の逸事」、「文苑」欄には犀東国府種徳「哀悼賦」と山下栄太郎「歌二種」が

あり、「雑報」欄へと続く。久徴館閉鎖と日清戦争の印象の強い号となっているが、ノンブル56頁という、この年としては標準的、創刊からの平均42.8頁よりは厚いボリュームの号に収まっている。

さて肝心の「論叢」欄の三記事である。土岐横は「久徴館閉鎖の議を読みて」において、「内に誠あれば功果息むときなし、外に験あるもの必ずしも著るしきを俟たず、語に曰く孝は百行の基なりと、其旧を忘れず郷里の念常に心頭に往来するもの君子たるに於て恥つる所なからん乎」〔第84号、4頁、読点は引用者〕と書き出し、郷土愛と全ての徳の基本となる「孝」について読者に注意を促す。「久徴館同窓会の会費を出すに吝なるものはれ或は西洋化の人乎或は文明風の士歟」と都会風のドライな個人主義を腐し、「久徴館内に同郷少年の集り宿するを見て楽まざるもの、是れ或は今の世に羽振り宜しき頭位の士歟、或は一種の臭味ある公債証書紙幣杯多く有する人ならん歟」〔以上、同前〕と近代的新興富裕層の有り様を風刺的に批判している。一方「試みに同郷人士の特性を觀ん乎」とし、彼等は「他の阿諛分疏すべけんときに却て黙々として涙を垂」れ、「他の点訴小才を逞ふすべけんときに却て自ら死に赴く」と評す。「維新前後より同郷人士にして或は富者一夕の歡樂の費にも当らざる底の金円に対し責を全ふすること能はざるか為めに一家兩三名手を携へて死に就きたるもの二件を聞」き、「其他主親の讐を討ち又は之に闘牽して身を致したるもの数十名を下らざるべし」と具体的な事例を挙げた上で「古より志士を逮捕し或は死に致らしめたるもの少なからず、当時時めきたる筋に附随したる小役人は虎の威を仮る狐、亦能く囚中の獅を苦しめ得意の面持をせしなり」述べ、加越能三州人士たちの世渡りの不味さ、いわば剛毅木訥さを嘆きながらも賞賛するとともに、「名を竹帛に垂るゝことを悦ぶもの豈に真の志士ならん乎」と維新前後で真の志士は命を奪われ、功名に駆られて阿諛分疏（顔色を見て、相手の気に入るようにふるまうことと、いいひらきをすること）した小役人ばかりが名声を得るようになり、真の志士は廃れたと言わんとしている。そして「久徴館は同郷壮士の発起設立にして、同郷少年壮士を養はんとする処なり」と久徴館を位置づけ、「既に壮士の設立に係る其存廢

盛衰、亦壯士と命を俱にせざるへからず」〔以上、第84号、5頁、同前〕と久徴館の廃止を壯士たち、即ち創立に関わった自分たちの世代の退場とともに受け入れる姿勢を見せている。ここでいう「壯士」は「臆病者を「ドヤス」を勇氣となせしもの」や「短刀を懐にし或は無辜の町人を脅し或は横着者の奴隷となつて僅かに口腹を充たすもの」といった一時期世間を騒がした悪名高き「壯士」ではなく、「我郷里の壯士なるものは彼輩と齒するを屑しとせず君子は似而非なるものを悪む」者であり、「壯士を粧ひ内却て婦人の如く幫間の如きもの」や「漢籍を読み武芸を学び以て壯士を氣取るもの」ではないとする。土岐が東京に出てきた1878(明治11)年当時、「余は大なる菅笠を冠むり、真鍮縁の円大なる眼鏡を掛け、曾て足袋を穿たず、一片西洋物を帯びず、身に絹服を纏ふことなく蓬髪粗衣以て輦殻の下に徘徊したと回想し、「余の友人に羽織を有せざるもの往々皆然り、常に袴の側部綻びたるものあり」〔以上、第84号、6頁、同前〕という状況で、「同郷紳士の卵子の一人は余等を評して穢悪き三副対」と称したという。「久徴館は実に斯の如き壯士の設立に係」ったものであり、現在のような立派な建物としての久徴館ができる前から「既に久徴館は顯然として存せしなり」と述べた。その昔日から比べると、今や「必らずしも常に靖献遺言を誦するを要せずと雖、愛読する所のは文芸倶楽部にして、意中に往来するものは東髪島田のみなる如き学生のみ寄宿するに至らん歟、世頭淫柔の俗心骨に浸蝕し」て、建物を失う以前から「既に久徴館なきなり」というのが率直な感觸のようである。

更に土岐はかつて「久徴館の爲めに壮宏なる家屋を建築せんことを希望し、大なる金力を左右し得る某氏の許に到り義捐を謀りしこと」があったことを打ち明けた。漢籍の素養があり一時は壯士の養成を主唱したことがあったというその人物は、「家屋は焼失の憂あり、又人間は病死の憂あり」として義捐の願いを断ったという。「今より追懐するも尚ほ発汗背に普きものあり」とする土岐のこの回顧は、「嗚乎松下村塾は一小茅屋に過ぎざりし、而かも維新大業を爲せしもの同塾門下生の力与つて渺しとせんや、本郷赤門より出づべき紳士学士、自後如何なる洪益を奏すべき歟」と締められている。こうした経験もあって「同郷人特性の

壮士にして尚ほ存在せん乎、久徴館の閉鎖憂ふるに足らざるなり」〔以上、第84号、7頁、同前〕と久徴館の閉鎖については未練がましいことは述べていない。「紳士の卵子と山師の手下の外あらずとせん乎、強ひて久徴館を存するも何の用かあらん」と挑発し、「君子の道久しければ即ち徴あり、世若し壮士の二字を冠する事を厭はざるものあらば希くは卑文を一読して思う所あれば幸甚」〔以上、第84号、8頁、同前〕と結び、後進たちの覚醒を鼓舞している。

「久徴館決して閉鎖すべからず」とするのは北越速記学会の会長を務めるなど速記法の専門家で、1887年には新たに『手話法』を開発して著していた吉木竹次郎である（ちなみに彼は合理的として文章を洋書風に「横書左読」させることを主唱しており、この著書では更に縦書きの文章を左から読ませるという突飛で挑戦的な取り組みをしている人物である）。吉木は前号の早川の寄稿を目にし、早川館長や育英社幹事らに面会して反対の意見をしたいところだが、その時間をとることができないので意見を速記させて同窓会に送りつけたという。冒頭では「創立以来実に此に十数年を経、県下学生の為めに大に其便益を与へ、又学生の父兄をして大に心を安んぜしめ、且つ同窓会雑誌号を重ねる八十三、会員の数千有余名に及び、其会員に便益を与ふる実に大なるものあり、加、越、能三州中我が久徴館の如きは曾て見ざる所、嘗に我三州のみならず、日本全国何れの県か能く此の如きもおあるや、各県先輩の常に羨みて止まざる所なり」と久徴館の意義について最大の賛辞を寄せてその閉鎖を惜んでいる。しかし「館長の遺憾言外に溢れ、実に一字一涙なるものあり、常に其遺憾なるは独り館長のみならず、恐らくは我会員たる者皆同感ならざるはなかるへし」〔以上、第84号、8頁〕と早川の苦渋の判断の様に同情してもいる。吉木の主張はこうである。

物滅して其不便を知り、人死して其徳を慕ふ、今俄に此館を閉ち、従て俄に此雑誌の発刊を廃せんか、十数年来の団結一時に解け、三州の人士は団結成り難きの気風なるに、今亦此館を鎖すあらんか、益々団結の道を失ふに至らん、一朝三州の人士に告ぐる所あらんとするも、其不便果して奈何、新聞紙其他雑誌の如きありと雖も、実に三州の有志の士を網羅するもの、

未だ決して此会の如きものあらざるなり、殊に県人互に學問に事業に相競争し、相抵勵するのを減し、人心益々疎遠に赴き、團結愈々難く、交情と風紀の上に於て一大退却を為すや明瞭なり〔第84号、9～10頁〕

即ち加越能三州人士の團結と情報交流のより所となっている久徴館とその雑誌を廃止することは、もとより團結力に乏しい三州人士にとっては致命的であり、「大木は金錢以て購ふへからず、而して之を伐るや安し」といった愚挙をするべきでないと述べ、育英社幹事諸君による閉鎖の理由と対処法の検討内容を説明することの必要を説き、それが無いならば「我輩は深く其先進諸君の後進に対する不親切を責めざるを得ざるなり」〔以上、第84号、11頁〕として稿を閉じている。

この吉木の意見に答えるように早川館長は「久徴館閉鎖の理由を論じて将来三州学生の養成に及ぶ。」の一文を寄せている。実際には久徴館での送別会において館生向けに発言した言葉であるが、吉木からの寄稿をはじめ前号以降の様々な立場からの反応を受けた上で、館生たちに伝えたメッセージであろう。早川が閉鎖を決意した理由は前号の記事と同様「第一時勢の変移と教育制度の完備と第二監督の困難と第三經費の欠乏とに因るもの」である。監督に関しては「不肖大学卒業以来九年間之を監督せるも其制度たる学生を緊束して之に入るゝにあらず、故に厳なれば去り寛なれば濫る、而して其学生の種類各異なれば之を率ゆること困難なるが如し、予は確信す、学生の目的各異なりと雖も之を統ゆる必唯一の方法ありと、然かも微力を以て独身之に当るの能くする所にあらざれば育英社等より非難を受けたること往々是なきにしもあらず、蓋し現行の制度の下此学生を監督する所以にあらざればなり」と、育英社管理下での久徴館の監督が限界に来ていたことを明らかにした。また「翻て館外社会の情勢如何を察すれば、下宿と自炊とを問はず一定の規律なくして、我館の如くに起立の制もなく整列の制も無く無言の制もなく門限の制もなく、尽寐するも戒しむるの人なく亦尤むる者なし、拍手一番すれば万事足るが如き大自由、大逸樂世界たり、門前此社会ありて而して此組織を以て此学生を入れ、而して之を拡張する其道なきにあらずと雖も、育英社の附属事業としては或は如何なるべきか未だ保す

べからざるなり」と久徴館外の環境の変化、東京の学生たちの下宿事情の変化も大きく影響を及ぼしていたことも示した。そして「抑も今日の育英社たる専ら貸費主義を取るものにして重きを之に措かざるもの、而して性質上年々歳々変更すへき議員幹事及び幹事長より成立す、豈能く遠大至偉の人材養成を望むへけんや、育英社既に斯の如し而して此社会に対して此学生を統んとす、豈難中の難事あらざらんや、是実に本館閉鎖の今日に止むを得ざる所以なり」と、中長期的な視点に立った人材育成が難しい体制と時代になっていたことも示している。「藩閥の事たる固より論するに足らずと雖とも、国家の盛衰強弱は一に人心の一致に帰す、我加越能三州は歴史上地勢上風俗上、将た利害上概して同一なること多し、是を以て三州を一国として結合を強固にするは国家の為め不可あるなし、否此三州の精神を確立するこそ国家の慶事なれ、唯此精神を誤用して私曲をなし、三州人にしあらば道德の罪人たるも之を恕し、三州以外の人たらば有為の人材をも用ざるは最も排すべきのみ」と三州の団結を望みつつもそれが藩閥に囚われることに繋がることに釘を刺した。しかしその起点となった久徴館は廃止されるゆえ「諸君は何を以てか将に之に代へんと欲するか」と館生たちに問いかけている。そして「今日人物養成の途たる公私学校ありて充分なる可き観あるも、資材を測り其性行を察し行往坐臥を奨励し監督するもの果して之あるか、大学の如き吾人在学中猶ほ道德会の如き練心修身上の会合ありしも今や之あるを聞かず」と教育環境の現況を述べ、「学生互に相補助する所あるか、相切磋する所果して何くにかある、或は二、三校友の往来するあらん或は郷友会設立あらん、然かも切磋の道の行はれざるは一なり此間独り久徴館の如き性質の組織ありて始めて切磋をもなし得へく相助くるをも得へし」と久徴館の存在の唯一性を協調した。しかし「今や之を廃せんとす、果して同郷人士の養成上學友切磋の道益々困難なりと信するなり」と危惧するのである。また、「近来各地の学校完備して学生の数益多きを加ふるも、学力品位は果して之に伴ふか、学生の数敢て欣ぶに足らず、唯有為の人物輩出してこそ好しけれ、今や天下の学生にして公共の精神に富み、天下国家を以て憂とするもの果して幾人かある、是実に痛哭流涙

に堪へざる所以なり」と学生の品位に対する懸念を指摘する。更に「学校の講義以て事足るとなすか、学校に於て何んそ学生の人物品位を高尚にすることを得んや、同志相謀りて直言切磋し、先哲聖賢の嘉言善行は是を善く翫味し、知徳勇一致し師之を率て始めて斯道を起すを得へきなり、而して斯道に適する独り久徴館の如き性質の者に於てあるのみ、今や寧ろ大に之を起すの必要あるに際し、却て将さに之を廃せんとす、独り三州の為のみならず却て亦国家の為め患ふべきの至とす」と憂えた。そして久徴館を去りゆく館生たち、今後は「何処にあるも前日に異るなく意を用ひて勉励せば成学の事期して待べし勉旃」と激励をした。

こうして久徴館における加越能三州の上京学生たちによる共同生活はその幕を閉じた。1870年代に寄る辺なく上京した学生有志たちが、都会の誘惑に惑わされることなく、郷土や国家を背負って立つ覚悟を持った壮士となるべく始めた共同生活は、次第にその輪を広げ、やがて育英社の目にとまったことで規模を拡大した。財政的後ろ盾を得て隆盛期を迎え、退館者や郷土との交流を支えるメディアとして同窓会雑誌を発行するに至った。順調に会員数を増やし、一見順風満帆に見えていた組織であったが、オーナーたる育英社と現場監督たる草創期の世代の幹事たちとの間に当初から横たわっていた同床異夢の構造的問題は、更に1880年代の空気を吸って育った世代の異なる館生たちの登場により深刻さを増し、瓦解を招いた。「学生にして公共の精神に富み、天下国家を以て憂とするもの」は希有となり、完備され始めた学校は「学生の人物品位を高尚にすること」には役立ちそうになかった。清貧たる共同生活を通じ学生が互いに補助し琢磨しあうことで培った同郷人としての団結と公共の精神は、それなくして学生たちの内部から湧き起こることは期待できなかつた。そして学生の近くでその「資材を測り其性行を察し行往坐臥を奨励し監督する」者も得られなくなった。明治改元より既に四半世紀が過ぎ、時代も世相も移り変わった。地方の不穏な動きや民権運動は抑圧され、国会開設の勅諭、大日本帝国憲法、教育勅語の発布、帝国議会開会へと続き近代国家の枠組みは固められていった。教育水準も普及度も低いとはいえ近代公教育の恩恵を受けて育ってきたネーション・ステートの

担い手たる日本人、天皇の国民が存在感を増していった。学生たちの社会を見る目が1880年代と1890年代とでは大きく変わっていたことは想像に難くないし、その一端は久徴館生に対する創立メンバーの不满に現れていたといえよう。

終刊号の「雑報」欄の末尾には「批評」と掲げられた稲垣伸太郎による「名誉の亀鑑を読む」が掲載されている。稲垣は「余輩幼よりして道を与り聞く、常に謂らく」として、「武臣の榮譽は命を王師に致すより大なるは莫く、武人の面目は屍を草野に暴すより大なるは莫しと」切り出す。「名誉の亀鑑」は「勲章を賜りたる凱旋将士の氏名を掲げ」ているが、これは「疑もなく、生き還りて勲章を受けたるものか、死して国事に尽せしものよりも、遙に榮譽なり面目なりとするものなり。然らずんは何か故に。先づ忠死の将士か名誉を表章せずして。爾かく生還の将士を先きにすることをなす。」と批判する。この「死して国事に尽せしもの」でなく「生き還りて勲章を受けたるもの」を顕彰することは「此膨張的日本の前途に至大の影響を有するものたることを記臆せざるへからず」と警告した。そして「生者に厚くして死者に薄きは滔々たる天下の事なり、天下皆然るか故に久徴館同窓会雑誌又爾かすると云ふ歟、然らば久徴館同窓会雑誌は是同噪会雑誌なり、滔々たる俗輩と同く噪くと云ふへき耳。」と、その様な記事が他ならぬ久徴館同窓会雑誌にあったことに嫌悪感を示したのである。そして更に稲垣は続ける。「余は尚一言すへきことあり、そは他にあらず、年金の傍に黒々しくも圈点を打ちたること是なり、是何等の怪事そや、年金を以て武臣の最大榮譽となして爾からせしか、年金を以て武人の最大面目となして爾からせしか、余輩は信ず、武臣の榮譽武人の面目は年金にあらずして、実に彼名誉ある金鷄勲章にあることを、然るに此名誉ある金鷄勲章に圈点は打たずして、武臣の最も賤むべき武人の最も遠くへき金銭に打ちたるは抑も何の故そや嗚呼世は既に黄金の時代となりしか」と感嘆して終えている。人間の榮譽をどこに置くか、このことは学問観や人生観を形成する上で大きな問題であり、現代の日本人のあり方にまで影響を及ぼす事項であるが、我々はこの点を対処療法的に駆け抜けた近代化の中で棚上げし、見失ってきたのかも知れない。

体験的文献紹介(28)

— 閑話休題Ⅲ 東京文化短期大学の改革 —

かんべ やすみつ

神辺 靖光(ニューズレター同人)

請われて教授兼教務部長になったからには衰えた東京文化短期大学をたて直さなければならない。どのように衰えたのだろう。まず短大生を含めて女子大生が増加しているこの時期に本学の学生は減り続けていた。そして授業に活気がない。老教師のマンネリ化した講義ばかりで休講が多い。やや活発なのは調理実習をはじめ実験実習と栄養士資格をとるための校外実習ぐらいである。前校長や病臥中の現学長が企画したガーデンパーティや修学旅行等の諸行事も中止されたままである。これらすべてを活性化しなければならない。

私は本学改革の第一段階として①家政学カリキュラムの改善、②学生募集方法の改善、③学生スクールライフの改善の3改善を思い定め、まず②の学生募集方法、次いで③のスクールライフ、最後に一番重要なカリキュラム改善と順序をたてた。

本学にも学生募集用の冊子があった。しかしかにも古色蒼然としている。ヴォリス建築の新渡戸記念館を表紙に創立者森本厚吉、初代校長新渡戸稻造の写真以下現在に至る学長・理事長、幹部教授の写真を並べて権威ぶるが、学生の活動姿が極めて少ない。全国の大学・短大案内はリクルート会社による簡素にして要領を得た方式が主流で、それを補完する学校案内書でなければならない。数年前からサイケ調が音楽美術のファッション等に浸透し、固い権威主義は若者に嫌われている。軽薄な世に阿おもねろと言うのではないが、若者の気風に眼をつむってはいけない。学校案内冊子の専門業者を呼んで全面的に作り替えた。青空に羽ばたく鳥の図柄を表紙に学生の活動を全面に載せた。即ち教員の指導下の実験、調理実習の一コマ、ディスカッション風景、そして学園庭園での教員を囲む談笑、そして校庭での学生同士のバレーボール競技等々、今日からこ

れを見れば平凡なありきたりのものだが、こんなものでも画期的であった。全国の高等学校に配布した。

これを機に制服を廃止しようと思ひ教授会にはかった。本学の制服は濃紺上下タイトスカートのバスガール風で、女子短大の一般的制服であった。短大の制服は徐々になくなりつつあり、この当時、東京で制服を着ているのは昭和女子大学と本学だけであった。教授会では案の定、一部の女性教員から反対があったが、男性教員と何よりも大浜学長代行の裁定で服装自由が決った。女子学生の急増にともない、女子学生の服装問題が各地で起っていた。派手なサイケ調の装ひんしゆくいが鞆はを買う一方、行動し易いジーンズはが流行った。関西のある女子大学で、ジーンズ姿では授業を受けさせないという教授が現われ、新聞を賑わした。本学では早くも一部数人の学生が自由服で登校しはじめたが大騒ぎすることもなく2年後には自由服が定着した。

次は体育実技である。短大の体育は健康衛生に関する講義と実技からなるが、本学は学校医による集中講義と高校体育教師の指導による週一回の実技ということにしてある。実際は体育館も専用のグラウンドもないので高校のグラウンドを借りてお茶をにごしていた。大学・短大の体育を高校の体育の延長線上に考えるのはよくない。高校の体育は小学校以来の体操に球技やダンスを取り入れてスポーツに近づけるものだが、大学・短大の体育はスポーツそのものを身につけねばならない。ただしこの年齢になると少年少女時代と違ってスポーツ技能の個人差が広がる。ここで私は数年前の64年に長野県軽井沢に浅間高原寮なる山荘ができたことを想い出した。病臥中の現学長が学生・生徒の夏期合宿用にたてたもので、私は企画の段階から土地探し整地計画に参画した。しかしその後、高校の体育クラブが合宿を兼ねて利用したことは聞いたが、あまり利用されてないらしい。一方、東京オリンピック終了後、選手村が空いたので、その宿泊施設やスポーツ施設を公的団体に利用させているという情報を得た。そこで浅間高原寮と代々木元選手村の施設を組み合わせ、わが短大の体育を集中的に実施する方策をたてた。友人に東京オリムピックのバレーボール選手・緑川君が

いたのでわが短大の体育講師を依頼し、詳細な計画をたて70年から実施した。第2学年は校外実習が多くなるため、第1学年の5月に代々木旧選手村で2泊3日、8月末から9月上旬、3泊4日の合宿つき体育実技を行った。しかし各地に勤労青年の家ができるのと体育設備のよい群馬県赤城山麓の青年の家を使用するようになる。この体育実技は旧来の修学旅行やガーデンパーティに替る行事化し、学生の楽しみになり、短大生活を活性化した。

さて最重要課題はカリキュラムの改革である。勢い衰えたりと言えども家政学科を直ちに変更することはできない。学科新設は他日のこととしてまず従来の家政学科を改革しなければならない。従来の学科目を担当した老教授たちが次々に辞めた時なので、後任者を探すためにもカリキュラム改革はチャンスである。大浜英子学長代行は日本女子大英文科の出身で、その後、東大の聴講生になって民法を研究したので家政学には全く関心がなかった。そこで本短期大学創設以来の家政科の変遷を調査した。幸い本学機関誌『文化生活』『家政科シリーズ』が保存されていたので容易に了解できた。

1950年、本短大創設時の家政学科は亡き創立者・森本厚吉著『家政学通論』の説に従い、家政学は消費経済学である、という趣旨のもとに生活科学、生活管理を基本として調理器具や洗濯機、掃除機等の効能実験や住居実習、調理実習とその理論を学習した。しかしそれらは次第に街の講習会や生活雑誌の主に活躍する所となる。59年に栄養士法、教育職員免許法施行規則の一部が改正されると本学は直ちに全学生が栄養士と中学校家庭科教員2級免許がとれるようにカリキュラムを改訂し、61年、62年の再度の改訂にもそれに応じられるように強化した。それを企画し実施したのは第2代学長・森本武也氏である。森本学長は当時の本学短大生像としてSemi-professional(半職業的の)を述べている。`栄養士の免許状も中学校家庭科教師の免許状もとりなさい。栄養士になるのもよいし、中学校の教師になるのもよいでしょう。しかし幸せな結婚をして家庭の主婦になるのもよいし、新しい職業につくのもよい。そのためには専門学科だけではなく広い教養を学習しなければならない、`というものである。当時、

本学にくる短大生の最大公約数的気分を言い当てている。だが、いずれも中途半ばでこれでよいのかという疑念も起る。全学生が栄養士と家庭科教員の資格をとり、かつ教養豊かな女性としての一般教育科目を多く修得させるというのだから毎日、授業は一ぱいである。学生は決められた講義を殆んど選択の余地なく朝から一日中履修しなければならない。よって出席カードを提出して抜け出す学生も多い。授業は学生の渴望をいやすものでなければならない。本学カリキュラムの欠陥は資格を全部とらせ、かつ揃えた教養的授業を全部受講させる画一制にあると思った。よってこれを撤廃し、栄養士法施行規則に準拠した栄養士コース、中学校家庭科教員資格を得られる教職コース、家政学の基本学科と一般教育の授業を自由に選択し卒業できる教養コースの三コース制をつくった。教養コースは四年制大学の三年次編入受験及び当時急成長はじめたホテルハウスキーパー用に国語と外国語の学科を多く設けた。このカリキュラム案を教授会にかけ、熱心な審議の結果、賛意を得て71年から実施することになった。そして新カリキュラム実施のための国語、外国語、一般教育の若い助教授、非常勤講師を招聘して1971年の新学期を迎えたのである。学生数は72年までは低調であったが73年から増加し、74年以後、総数400名以上となり本学創立以来の活況を呈するようになった。

参考文献

東京文化短期大学『文化生活』『家政科シリーズ』『東京文化タイムス』
神辺編集『東京文化学園五十年史』

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

小根山美鈴さんが記された「業務改善と事務処理の電算化：1970～1980年代の学習院」『学習院アーカイブズ ニュースレター』18(2021年7月)を拝見しました。小根山さんは、業務改善と事務処理の電算化がもたらした意味について、「学習院において事務の歴史における大きな転換期であったと言っても過言ではない。情報技術の発達に伴い、そのことが業務や働き方をも変わる流れは、現代にも通ずるのではなからうか」(7頁)と述べています。この点は、とても重要な示唆を含んでいるものと思います。ちなみに、私がかつて務める大東文化大学では、1976年春から富士通製のコンピュータを導入し、学生の実習や入試業務などに効果をあげた・・といえます。当時の大学新聞『大東文化』286(1977年5月)には、コンピュータ効果の模様について、「入試データの作成は、前年度までは関係教員が総がかりでも延べ丸二日かかったうえ計算間違いも避けられなかったが、電算機は同じ作業を誤りなく十五分で完了した。時間的にはほぼ二百分の一というスピードぶり、可否通知の送り出しも今年はきわめて順調におこなわれた」(1面)と指摘しています。小根山さんによれば、学習院では「職員の働き方をも変える大きな転機」となったとも指摘しています。業務の技術革新が電算化の導入普及により、間違いなく大学の現場にもたらされたといえるでしょう。(谷本)

『新型コロナウイルスとの闘いⅡ 看護師が見たパンデミック』(PHPエディターズ・グループ、2021年7月28日刊行)に、箕浦洋子氏(関西看護医療大学看護学部教授)の「コロナ禍における看護教育のあり方 — オンライン授業、オンライン講習で看護の質は確保できるのか —」が収録されていた。箕浦氏は、コロナ禍で看護学大学でもオンライン授業を余儀なくされたこと、看護教育におけるオンライン学習の課題として、①長時間にわたるオンライン学習で学習効果が得られるのか、②主体的学習ができるかを挙げ、コロナ禍で教育を受けた学生にコミュニケーション力や状況判断力の不足、看護技術や他職種協働に関する経験不足、社会人としての自立力不足などを感じていると指摘している。箕浦氏の次のような呼びかけは、教員養成にかかわる私にとっても切実に感じられる。「教育の問題は、目に見える今の問題で



はなく、後からボディーブローのように利いてきます。非常時に行った教育が今後どのような形で臨床看護の質に影響するかは未知数ですが、1人の看護師の将来と看護の質の確保に繋がってきます。まずは教育と臨床が手を組み、この難局を乗り越えることが解決の一步だと思います」。また、この本には、大迫ひとみ「最前線看護師のチャレンジ」、岡崎悦子「感染管理担当として経験してきたこと」、加納由香「激動した救急病棟の1年を経験して」など、コロナ禍の最前線の医療現場を経験した看護師による記録が多数収録されている。

久しぶりの映画鑑賞として、映画『プリズンサークル』（坂上香監督、2019年）をみた。2000年代後半に開設された刑務所の一つである島根あさひ社会復帰促進センターで、受刑者同士が輪になって対話しながら更生をめざしていく「TCサークル」（セラピューティック・コミュニティ）という取り組みが始まっている様子を記録した映画である。「取材許可まで6年、撮影2年—初めて日本の刑務所にカメラを入れた圧巻のドキュメンタリー」（プリズン・サークル公式ホームページより <https://prison-circle.com/>)としても注目されている映画だが、わたしは「TCサークル」が学校教育での話し合い活動と重なって見えて仕方なかった。受刑者となった方々の学校教育はどのようなものだったのか、刑務所内で「TCサークル」で取り組まれている当事者同士の話し合い活動が、学校教育では必ずしもうまくいっていないように感じる。では、どうしたらよいのか、自分の問題として考えさせられた。さまざまな人と語り合ってみたい映画である。

会員消息

フリーアナウンサーである大神いずみさんの「私の東京物語」5(2021年7月29日、東京新聞所収)を拝見しました。大神さんの日テレ・アナ新人研修時代の思い出についてです。大学卒業後に、憧れの日本テレビ・アナウンス部に入社した大神さんは、当時日テレ社屋が麴町・二番町にあり、その新人時代の記憶が生々しく、フリーに転身した現在でも「いつ何時訪れても自然と泣きたくなる街」だといいます。とくに新人研修は、当時の大神さんにとって「鬼のように厳しい修行」で、「文章を最後まで一度もかまわずに読めたためしがない」かったそうです。言葉を知らな過ぎた当時の大神さんに対して、先輩らから「言葉のむちをビシビシ受ける。痛い。何度出直しても全く褒められることはなかった。泣きながら屋上で発声練習。見渡す麴町の景色は、華やかに見えて真っ暗で厳しいテレビの世界を教えてください」とのこと。夢いっぱいな社会人1年生として、ほろ苦いカルチャー・ショックの洗礼を痛烈に受けた記憶は今でも忘れがたいものであり、それはきっと大神さんの仕事のキャリアの原点(叱咤の糧)といえるのかもしれませんがね。ちなみに若き時分の私について考えると、大学アーカイブの世界の扉を叩いて、すでに活躍されていた先輩格な京都大学の西山伸さんや学習院大学の桑尾光太郎さんらがちょっと眩しい存在でしたし、教育史のほうでも、旧制高等学校史研究ですでに注目されていた・先輩格な京都大学の富岡勝さんが居て、この先研究者として自分なんとかやっていると、正直不安がいっぱいでした。そんな最中、不思議なご縁でもって金沢大学の助手として採用され、無我夢中で務めた経験が、今現在の私の礎となっているといえるでしょう。(谷本)

京都文化博物館で開催されている「戦後京都の「色」はアメリカにあった!」展に行ってきました。この展示では、終戦後1945年から52年までの京都の姿をカラーで残した写真が展示されていました。これまで、学校資料を研究するにあたって多くの資料にあたってきましたが、この時期の写真は白黒写真が多く、カラーの写真を見るのはとても新鮮でした。白黒写真は、その白黒というイメージから、どうしても「過去のモノ」や「遠い昔のモノ」という印象が自分のなかで先行してしまっていたが、カラー写真になることで、「より身近に」そして「現在のこと(現在とつながっていること)」と捉えることに繋がったと思います。なお、本展示は2021(令和3)年9月20日(月)まで開催される予定です。(八田)

78号消息で書いた大きな山一つはその間に姿を見せた中規模の山二つに阻まれ、結局持ち越したまま現在に至っています。そして遭難しそうです。(小宮山)

東大の職域接種で無事ワクチン接種を終えることができました。ただ、予想以上に副反応が長引き、原稿に間に合わせることができず、、、接種前に諸々溜め込んでいて疲労が溜まった状態で接種したためかもしれません。来月は史学会もあります。また、今年は高校で非常勤をやっている関係で9月早々から新学期が始まります。体調管理に気をつけつつ、研究を進めたいと思います。(猪股)

8月は授業が終了していますが、採点作業や教員採用試験対策などに追われながら、夏期教育セミナーでの発表準備などを少しだけを進めるというペースで過ぎています。しかし、今回のコラムを書きながら、大学での授業や諸活動のなかで出合った学生や同僚の話を大切に聞いていくことが、研究上の大きなヒントになることもある、と思い直しました。

お知らせをいくつか。8月28日の夏期教育セミナーに参加されるみなさん、ぜひ感想を本ニュースレターにも投稿していただけないでしょうか。短い感想でもでも歓迎です。

今年は9月25日・29日にオンラインで開催される教育史学会のプログラムに、本ニュースレター同人の田中智子さん(早稲田大学)が「敗戦直後の大学学生自治会と占領軍とのかかわり」のテーマで、猪股大輝さん(東京大学大学院・学生)が「19-20世紀転換期アメリカにおける市民性教育と愛国主義の関係」のテーマで研究発表されることが記載されていました。教育史学会会員以外の方も教育史学会第65回大会Webサイト < <https://jshse-taikai.jp/> > からお申し込みいただけます(参加費は無料)。ぜひ。

京都市学校歴史博物館で展示「京都における幼稚園のあゆみ」が11月29日まで開催されていますので、次頁にポスターを貼り付けます。ただし、新型コロナウイルス感染流行のため、9月13日までの臨時休館が発表されています。展示に行かれる前に同館のWebサイト<http://kyo-gakurehaku.jp/>をご確認ください。関連イベントも開催されます。まだ9月18日と11月6日の講演会はまだ間に合いそうです(ただし先着順です)。

(富岡)

本ニュースレターを印刷される場合、Adobe Reader などの「小冊子印刷」機能を使って A4 サイズ両面刷りにすれば、ちょうど A5 サイズの小冊子になります。

— 企画展 —

前期

令和3(2021)年
7/31(土)
~9/26(日)

京都における 幼稚園の あゆみ

後期

令和3(2021)年
9/28(火)
~11/29(月)

~みんなのたのしいところはいつまでも~

上左: 幼稚園講義録(複製) 昭和3(1928)年
 上中: 上杉小・幼稚園(複製) 大正期 ※複製に指示予定
 上右: 幼稚園概要(複製) 昭和(複製)
 中左: 幼稚園(複製) 昭和(複製)
 中右: 幼稚園(複製) 昭和(複製)
 下: 幼稚園(複製) 昭和(複製) ※複製に指示予定

協力: 京都府立幼稚園協会
 京都府立幼稚園教育研究協会
 京都府立幼稚園協議会
 イラスト: 田端 美穂

※新型コロナウイルス感染症への対応のため、開館・内容等が変更となる場合があります。

開館時間: 9時~17時(入館は16時30分まで)
 休 日: 毎週水曜日
 (ただし、11月3日(水)は開館、4日(木)は休館)
 入 館 料: 大人200円 小・中・高校生100円
 ※市内の小・中学生は土・日曜日入館無料

京都市学校歴史博物館
 Kyoto Municipal Museum of School History

【関連イベント】

① 講演会
「保育現場における「言葉」の育み」

日 時: 8月9日(月・振休) 14:00~15:30
 講 師: 和崎 光太郎
 (東京福祉大学准教授)

会 場: 京都市学校歴史博物館講義室
 定 員: 30名(要申込/先着順)
 参加費: 無料(ただし入館料が必要)
 受付開始: 受付中

主催: 京都市学校歴史博物館、京都歴史文化施設クラスター実行委員会
 令和3年度 文化庁 地域と共創した博物館創造活動支援事業

② 講演会
「戦前期の京都市における幼稚園の歴史」

日 時: 9月18日(土) 14:00~15:30
 講 師: 林 潤平
 (京都市学校歴史博物館学芸員)

会 場: 京都市学校歴史博物館講義室
 定 員: 30名(要申込/先着順)
 参加費: 無料(ただし入館料が必要)
 受付開始: 8月1日(日)

主催: 京都市学校歴史博物館、京都歴史文化施設クラスター実行委員会
 令和3年度 文化庁 地域と共創した博物館創造活動支援事業

③ 講演会
「SDGs時代における幼稚園の未来—
幼稚園資料のポテンシャルと戦後の
京都市の幼稚園史から考える」

日 時: 11月6日(土) 14:00~15:30
 講 師: 林 潤平(京都市学校歴史博物館学芸員)
 会 場: 京都市学校歴史博物館講義室
 定 員: 30名(要申込/先着順)
 参加費: 無料(ただし入館料が必要)
 受付開始: 10月1日(金)

主催: 京都市学校歴史博物館、京都歴史文化施設クラスター実行委員会
 令和3年度 文化庁 地域と共創した博物館創造活動支援事業

受 付: 電話(075-344-1305), FAX(075-344-1327), Eメール(rekihaku-jigyuu@edu.city.kyoto.jp)。
 希望される講演会名, 参加代表者氏名, 代表者の電話番号, 参加人数を明記の上, ご連絡ください。

当館では、新型コロナウイルス感染症予防対策を行っております。そのためイベントの内容等が変更となる場合があります。また御来館の皆様にはマスクの着用(御持参)について、御協力を賜りますようお願い申し上げます。